HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	＜肉＞の存在について : メルロ=ポンティ後期哲学における「可逆性」の意味
Author(s)	吉谷, 啓次
Citation	北海道大學文學部紀要, 41(2), 189-214
Issue Date	1992-10-27
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33604
Type	bulletin (article)
File Information	41(2)_PR189-214.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

〈肉〉の存在について
――メルロ＝ポンティ後期哲学における「可逆性」の意味――

吉谷啓次

はじめに

メルロ＝ポンティのいわゆる後期の哲学は、ほとんどの場合、彼の遺稿『見えるものと見えないもの』[1]の最後の章「絡み合い――キアスム」であるていど展開されている「肉」(chair)の概念と、そのあり方としての「可逆性」(réversibilité)によって説明される。可逆性とは、たとえば裏返しても着ることのできるブルゾンのあり方のことであり、方向を逆転できるということ、反転可能性のことである。そのなかでも、メルロ＝ポンティがつねに参照するのは両手を触れあわせるときに見出される可逆性である。つまり右手が左手に触れるとき、左手が右手に触れかえすこともできるという「触れる手」と「触れられる手」の身分・役割の反転の可能性である。そして、こうした可逆的な交換を演ずる基体、可逆性の働く場となるのが〈肉〉である。メルロ＝ポンティはこうした可逆性の関係を、私と私の身体(魂と身体)のあいだだけではなく、私と世界(意識と世界)のあいだ、私と他者(我と他我)のあいだにも見出し、テク

ストはそのそれぞれにおける可逆的な現象を吟味している。『見えるものと見えないもの』のなかに見出される「キアスム(交叉配列)」、「侵蝕」、「越境」、「跨ぎ越し」、「絡み合い」などの特異な表現も、「可逆性」のさまざまな局面を言いあてようとしたものである。いずれにしても、左手に右手が触れているときに、左手は右手に触れかえすことができるという可逆性の現象を中心的なモデルとして、彼はわれわれと世界の関係を考えようとしている。ところが、「絡み合い――キアスム」の章を一読すると、そこに「可逆性」の概念をめぐってある種の揺らぎ、あるいは緊張が見出される。メルロ=ポンティはある箇所で、前言を翻すように、触れあう両手の可逆性にしても実のところ実現されない、一致には到達しないと言うのである。この揺らぎ・緊張は何を意味するのか。これをテクストが遺稿であるという事情に簡単に帰すことはできない、とわれわれは考える。少なくともわれわれはこの揺らぎ・緊張を前言の撤回、修正と見做すのではなく、その意味を吟味することによって、「可逆性」という概念そのものが「実現されない」、「一致に到達しない」ことをあらかじめ含みもっているということを明らかにし、メルロ=ポンティが言いあてようとしていた〈肉〉とはいかなるものであるのかを考えてみることにする。

I　他者との可逆性の問題

たとえば、『見えるものと見えないもの』の編者であるクロード・ルフォールは、最近の論文のなかで、メルロ=ポンティのテクストのなかに「可逆性経験に基づく解釈と異他性(alterity)の還元不可能性をわれわれに承認させる解釈のあいだの緊張」[2]があると指摘している。メルロ=ポンティの遺稿の編者であり、優れた評者であるルフォールの発

言を軽々しく無視することはできない。実際、テクストのなかに、先に述べたことを取り消してしまっているように思われる箇所が見出されるのである。ルフォールの言う「緊張」は、たとえば他者を問題にするときに端的に現われるように思われる。

周知のように、メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』の時期から、自己と他者の関係が、いわゆる主観・対象の関係と同じタイプの関係と見做され、通路を断たれて対立するのに先立つ、他者と自己の「共存」の次元、共通の基盤を見出すことによって、いわゆる他者問題を回避しようとしてきた。[3] この共通の基盤に、メルロ＝ポンティは〈肉〉と名づけるのである。〈肉〉とはいわば主観と対象が重ね合わされたもの、二つの側面を併せもつものと考えられる。「可逆性」という概念も、私と他者が〈肉〉の次元ではその役割を交換しうるという事情を表現するものである。メルロ＝ポンティはこう述べている。

> 握手もまた可逆的であり、私は私が触れていると同時に触れられているとも感じることができる。……一つ一つの有機体の内部では共働というものが可能であるのに、どうして異なった有機体のあいだに共働というものが存在しないと言えるのか。こうした有機体の風景は互いに縺れあい、その能動と受動とは正確にぴったり重なりあうのである。(VI. 187)

両手を重ねあわせるときに〈触れる手〉と〈触れられる手〉の関係、いわゆる主観と対象の関係が逆転しうるように、握手においても触れる私と触れられる他者の関係は逆転しうる。視覚の場合でも、私と他者が互いを見るとき、〈見る

もの〉と〈見られるもの〉の関係は逆転しうる、これが、可逆性の概念が支える主張である。われわれの一般的な常識から見ても、これは頷きうることのように思われる。これがルフォールの言う「可逆性の経験に基づく解釈」である。

しかし、他者は、「私が見る」とまったく同じ意味で見ていると言えるだろうか。他者と私のあいだに可逆性がある、他者と私のあいだで「触れる」・「触れられる」の役割の転換が可能だと主張することは、暗黙のうちに他者を「見ている私」に還元してしまうことではないのか。「見る私」と一致しうる他者を想定しなければ、完全な交換はできないはずだからである。私が見られるということは言えても、実際には他者が見ていると言うことはできないのではないか。その役割の完全な転換が保障されていると言うことはできないのではないか、つまるところ私と他者は一致しないのだから、この身分の交換は成立しないのではないか、こうした疑いを提出することはできる。つまり、他者がまさに他者であること、他者は実のところ私とは異なっているということから出発すると、私と他者のあいだに可逆性を認めることはできないということになる。ルフォールの言う「異他性の還元不可能性をわれわれに承認させる解釈」とはこうしたことであろう。実際にテクストのなかで、メルロ＝ポンティじしんが、見ている他者にたどりつくことはない、と述べているのである。

一致はつねに逃れていってしまう。何故なら私は私の身体のあるところから見、それは他者には占めることのできない場所だからである。「私はつねに私の身体と同じ側にあり、私の身体は、私に、つねに変わらぬパースペクティヴから与えられる」(VI. 194)。このかぎりで、「私が見る」と「他者が見る」とは異なる。これは先に挙げた「可逆性の経験に基づく解釈」と明らかに対立している。メルロ＝ポンティは『見えるものと見えないもの』のなかで、こうし

た二つの異なる発想に基づく記述を繰りかえし行なっているようにも思われる。これがその通りであるとするなら、ルフォールの言うように、このテクストには「緊張」、決着のつけられていない対立があることになる。「可逆性」の概念が、メルロ＝ポンティの後期哲学のなかで中心的役割を演じているのかどうか、メルロ＝ポンティじしんが述べているように、それが「最終的真理」（VI. 204）と言えるのかどうか疑わしくなってしまうのである。

この「可逆性」概念をめぐる揺らぎ・緊張は、当然のこととして、メルロ＝ポンティのもう一つの鍵概念である〈肉〉にも問題を生じさせる。可逆性が成立する境位として〈肉〉が考えられているからである。可逆性が実のところ実現されないとするなら、〈肉〉を越えたもの、あるいは〈肉〉ではすくいとれないものを考えなければならなくなってしまう。逆に言えば、可逆性の場としての〈肉〉におさまりきらないもの、「その上か下にあるもの」[4]を考えるから、ルフォールの言う「異他性の還元不可能性をわれわれに承認させる解釈」が出現してくる。「見る」ということに関して、まさに他者は、この〈肉〉から洩れていくもの、〈肉〉を越えたものであるように見える。メルロ＝ポンティの後期哲学において「可逆性」が「最終的真理」であるとするなら、むしろこのような〈肉〉とは異なるもの、可逆性を実現させないものなど、そもそもその射程のなかでは考えられない、とルフォールは主張する。

しかし、これはメルロ＝ポンティの哲学の躓きを示しているのか。メルロ＝ポンティじしんが次のように述べている。

> ところで、私が、私の右手による物の触覚と私の左手によるその同じ右手の触覚とをぴったりと重ねあわせることができず、ある点での触覚経験とその《同じ》点での次の瞬間の触覚経験とを――あるいは私の声の聴覚経験

と他人の声の聴覚経験とを――ぴったりと重ねあわせることができないということ、それを絶えず回避していくということ、これは躓きではない。(VI. 194)

引用の末尾でメルロ＝ポンティは「これは躓きではない」と述べている。これはいかなる意味なのか。そもそも、交換が実現しないということが「躓き」と思われるのはどうしてなのだろうか。それは、「可逆性」が二つの役割や側面の完全な交換、一方が他方に完全に追いつきうることを意味していると考え、そうした可逆性が成立するものを〈肉〉と見做すからであろう。はたしてメルロ＝ポンティが言いあてようとしていた「可逆性」とは、交換される二つの一致を前提としているのだろうか。むしろ、「可逆性」とは現実的な交換の不成立がもともと含まれているあり方を名づけるために導入されたのではないか。さらに〈肉〉にしても、一致に至ることを保障する同一的なものの重ねあわせではなく、われわれにはついに到達できない〈異他性〉を含みもったものとして考えられていたのではないか。まず、われわれはこの〈肉〉の概念がどのようなものと考えられているのかという点から吟味することにしよう。

II 〈肉〉と二元論

メルロ＝ポンティの哲学は、いわゆる伝統的な二元論の乗り越えに向けられていたと言うことができる。伝統的な二元論とは、魂と身体あるいは心的なものと身体的なもの、主観と対象、意識と世界という互いに外的な二実体あるいは二秩序を想定し、一方から他方への橋渡し、あるいは一方の他方への還元を上首尾に行なおうとするものである。

一方には自立的で、まったく客観的な対象ないし世界を置き、他方には、その世界のなかには場所を占めない、純粋なまなざしとしての意識あるいは主観を置くのである。こうした哲学的二元論は至るところに見出すことができるが、しかし、この二元論は、あらゆる場面に亀裂を生じさせ、私と私の身体、私と世界、私と他者のあいだに埋めることのできない断絶を生み出してしまう。二つの実体ないし秩序がまったく異なるものであるかぎりで、一方を他方に基づけることは、何かを無視したり、一方を歪めることになってしまう。純粋なまなざしによって完全に理解されるものを世界と見做したり、あるいは世界そのものをわれわれの理解の埒外に置いたりするのである。おそらく世界はわれわれにとっていっさいの謎を含まない、透明な対象でも、ついに理解することのできない対象でもない。主観にしてもこの世界に場所を占めないなどということは考えられない。

メルロ＝ポンティがとりわけて問題としていたのは心身の二元論である。魂と身体、これがまったく秩序を異にする二つの実体として分断される以前の状態、分割が成立する以前に、そのどちらの側にも完全には吸収されないある境位を、さらに言えば、魂と身体という二つの秩序がそこから形成される境位を見出そうとする。二元論のアポリアからぬけだすこと、これがメルロ＝ポンティの哲学の一貫した企図であった。そして、メルロ＝ポンティの後期哲学の鍵概念である〈肉〉は、こうした二元論の乗り越えの先に見出されていたものである。

ところで、メルロ＝ポンティの行なった(行なおうとした)二元論の乗り越えとはそもそもいかなるものであったのか。それを〈肉〉の一元論への移行だと容易に断定することができるのだろうか。『見えるものと見えないもの』のなかでメルロ＝ポンティが分節しようとしていた、この〈肉〉の概念はときとして、そうした一元論への回帰という解釈の枠組みで読まれることがある。

〈肉〉の存在について

たとえばメルロ＝ポンティはこの〈肉〉について、『見えるものと見えないもの』に付けられた「研究ノート」のなかで、次のように述べている。

……〈肉〉は、客観的身体ではなく、魂がじぶんのものと考える身体(デカルト)でもなく、感じられる、感じるという二重の意味での〈感じられるもの〉(le sensible)である。(VI. 313)

さしあたり、われわれは〈肉〉を、感覚与件や意識がもつ表象ではなく、そこに見出されるもの、「感じられる」という一方だけをもつ平板なものではない奥行きを背後にもって存在しているもの、われわれが見、触れているもの、そのかぎりで〈見えるもの〉(le visible)、〈触れられるもの〉(le tangible)、一般的には〈感じられるもの〉と理解しておく。可逆性はこの〈感じられるもの〉を場として働くのである。そして〈肉〉は、通常主観の側、あるいは心的なものの側に帰せられる「感じる」という能動と、世界の側、あるいは身体的なものの側に通常求められる「感じられる」という受動とを併せもつとメルロ＝ポンティは言うのである。つまり〈肉〉は、可逆的に主観でも対象でもある一元論的原理であり、そもそも〈肉〉の外、〈肉〉とは異なるものなど考えられないということになる。これが一元論的原理への回帰という枠組みによる解釈である。しかし、単純に、二元論の乗り越えすなわち一元論への移行という解釈の枠組みでテクストを読もうとするとき、メルロ＝ポンティの記述はその期待を裏切るようなかたちをしばしば取る。〈肉〉が可逆的な交換を成就するという解釈と、可逆性が実現されない場面を強調する解釈のあいだに緊張を見出すルフォールの指摘も、〈肉〉を一元論的原理と見做し、可逆性を「最終的には一致をもって成就する」と考える理

解に基づいていると言えるだろう。たとえば、次のメルロ＝ポンティの文章はそれを容認するようにも見える。

> ある種の〈見えるもの〉、ある種の〈触れられるもの〉が、それじたいもその部分である〈見えるもの〉の全体、〈触れられるもの〉の全体へと反転させられるときに、……あるいはそれらのあいだに、それらの交流を通して、一つの「可視性」、一つの「触れられるものそれじたい」――これは、事実としての身体にも、事実としての世界にもそれに固有なものとしては属さない――が形成されるときに、視覚があり、触覚がある……。（VI. 183）

〈見えるもの〉、〈触れられるもの〉、一般的に言うなら〈感じられるもの〉だけがあり、他のものはいっさい存在せず、そのなかの一つが全体へと向きを返すときに視覚、触覚ということが起こる、とメルロ＝ポンティは述べているのである。

ところが、〈肉〉という概念によって、あらゆる二元論的表現が廃棄されうるわけではない。メルロ＝ポンティは相変らず、主観、世界さらには反省といった、二元論を前提としていると目される表現を十分に意味のあるものとして使っている。一元論への移行という枠組みで読むときに見出されるこの用語法の不徹底をもって、メルロ＝ポンティは結局のところ、徹底的に二元論を乗り越えてはいないのではないか、と批判するべきなのか。メルロ＝ポンティが哲学的二元論の乗り越えを企てていたことは確かである。しかしおそらくそれを主観・対象といった区別、差異の廃棄を目指したものだと見做すことはできない。一元論的原理への移行という枠組みで読むのではなく、メルロ＝ポンティがどのように哲学的二元論を乗り越えようとしていたのか、これに的を絞って考える必要があるだろう。

〈肉〉の存在について

メルロ＝ポンティの哲学の中心的なトポスである身体は、言うまでもなく一つの〈肉〉である。それに関する記述を手掛かりにして、この二元論の乗り越えのあり方を見てみることにしよう。『見えるものと見えないもの』は身体についてこう述べている。

……われわれの身体は二つの葉層をもった「存在」であり、その一つはさまざまな物のなかの一つの物という葉層であり、もう一つは物を見、物に触れる葉層である、とわれわれは言う。（VI. 180f）

これは先に引用した〈肉〉についての規定とほぼ同じ方向にあるものだと言えるだろう。もちろん身体が〈肉〉そのものであるというわけではない。身体は〈肉〉の一つである。『見えるものと見えないもの』においては、〈肉〉あるいは〈見えるもの〉という言い方によって、「身体」は彼の哲学の中心から外され、〈肉〉の、典型的ではあるが、たかだか一つのヴァリアントにすぎないものになっている。そして身体に見出される〈肉〉の典型的な性格として「二つの葉層をもつもの」とされるのである。つまり、身体は「さまざまな物のなかの一つの物」といういわば対象の側に認められていた側面と、「物を見、物に触れる」という主観の側に認められていた側面の二つを併せもつ存在とされるわけである。しかしこの二つの「側面」、二つの「葉層」という言い方には、二つのものがまず先にあってそれらを加算したという含意が見え隠れする。先の引用のあとで、次のように述べられている。

少しまえにわれわれが述べたように、身体は二つの葉層から仕立上げられており、その一つ、つまり《感じられ

る物》という葉層が残りの世界と連帯している、と言うことはできない。身体のなかに二つの葉層や二つの層があるのではない、身体は根本的に、たんに見られた物であるのでも、たんに見るものであるのでもない。(VI. 181)

この身体に見られる二つの側面ということにしても、二つのもの(魂と身体、意識と世界、心的なものと身体的なもの)があらかじめ存在し、それらを加算して「身体」という概念に仕立上げられるということではない。二つは「融合」している、「合一」しているのである。ところが、メルロ＝ポンティが何度も強調するように〈肉〉は、精神や物体がそうであったような実体ではない。二元論を決定的に乗り越える一元論的原理として新たな実体が提出されていると考えることはできない。問題なのは、その二つがどのようなかたちで融合し、合一しているのかということである。

この〈見るもの〉と〈見えるもの〉の関係についてメルロ＝ポンティはさまざまな表現を試みている。「比喩を用いるならば、感じられた身体と感じる身体とは、裏と表のようなものであるとか、一つの円形のコースの二つの弓型の部分のようなものだと言ったほうがよいだろう」(VI. 182)。ここでの「裏と表」という言い方は、一方が表に現われているときには他方がつねに裏になっているということを意味している。つまり同時に表面に出て一致するわけではなく、一方が他方を覆い隠すようなあり方をしながら、それが裏返されることがありうるということである。「視覚は〈見えるもの〉への参加とそれとの協力(apparentement)であり、それを包み込むのでも、それに決定的に包み込まれるのでもない、〈見えるもの〉というこの表層の薄皮は私の視覚と私の身体にとってしか存在しない。しかし、この表面の下にある奥行きは私の身体を含み入れ、そして私の視覚を含み入れる。見える物としての私の身体はさらに大きな光景のなかに含み入れられる。しかし私の見る身体はこの見える身体を支え、その身体とともにある〈見えるもの〉

すべてを支える。相互の嵌め込み、互いの絡み合いがある」(VI. 182)。〈見るもの〉と〈見えるもの〉は、相互に嵌め込まれ、循環し、一つの円環をなしている。つまり〈見るもの〉と〈見えるもの〉とは完全な融合、一致という状態にあるのではなく、一方がつねに他方を呼びだし、あるいは一方がつねに他方を基づけるという関係にある。二つが一致するというのであれば、〈見えるもの〉が〈見るもの〉に完全に吸収されるか、〈見るもの〉が〈見えるもの〉に解消してしまうことになるからである。〈見るもの〉と〈見えるもの〉の可逆性の関係とは、まさしく「裏と表」の関係のように、一方が他方に追いつこうとするその瞬間に、役割の反転が起こり、その位置は入れ替わっているとしても、もともとの〈見るもの〉と〈見えるもの〉の関係になっている、というものであるだろう。つまりある種の「二元性」を保持し続けているのである。

こうした可逆性をもとにして考えてみるなら、身体を例とした場合には、〈肉〉は心的なものと身体的なものという二つの側面の重ねあわせであり、そのあいだの循環、可逆的な反転の可能性を併せもつものであるということになる。それはつねに表に現われているもの(たとえば〈見えるもの〉)と対になるもの(この場合、〈見るもの〉)を裏に併せもち、それらの反転が可能なのである。〈肉〉において、相互に還元されえない二つの極が、いわば緊張したかたちで与えられている。単純な一元論への回帰ではなく、つねに対になる二つが与えられながらその一方だけが現われているという、新しいタイプの「存在すること」として〈肉〉が提起されていると言えるだろう。可逆性という概念はその「存在」のあり方である。Ⅲでは『見えるものと見えないもの』の「絡み合い――キアスム」の章での可逆性の記述に付きあうことにする。

Ⅲ 「可逆性」の意味

われわれは、「可逆性」とは方向を逆転できるということ、あるいは、裏表を反転できるということだと理解してきた。メルロ＝ポンティは『見えるものと見えないもの』の「絡み合い――キアスム」の章でこの可逆的な現象をさまざまな次元で観察している。それを手掛かりとして、裏表を反転できるとはどのようなことなのか、メルロ＝ポンティが言いあてようとしていた「可逆性」とはいかなるものであるのかを探ってみることにしよう。

たとえば、M・C・ディロンは、『見えるものと見えないもの』のなかの可逆性に関する記述には「変貌」(vicissitude)があり、メルロ＝ポンティは記述に「修正」を重ねており、それらの修正を整理することによって「可逆性」概念に纏わる誤解を取り除くことができる、可逆性とは「差異を含む同一性」という新しい哲学的原理を分節するために提出されたものだと述べている。[5] この主張に大きく異を唱えるものではないが、われわれには、それが必ずしも「修正」を加えられた上での「変貌」であるとは思われない。また、先に引いたルフォールはそうした記述の変化に解消しがたい「緊張」を見出している。つまり「絡み合い――キアスム」の章のなかには調停しがたい二種類の発想が存在していると言うのである。すでに述べたが、そう見えないこともない。しかし、ルフォールの主張をそのままに肯定することもできない。むしろこの記述の変化を「可逆性」という概念そのもののなかに含まれる緊張として読むことによって、言い換えるなら、ディロンのように「修正」による「変貌」としてではなく、あらかじめ含みもっていた相貌として読むことによって、メルロ＝ポンティの言う可逆性、さらには〈肉〉に接近しうるように思われる。ここで、われわれにとって重要と思われる、可逆性が問われる審級を見てみることにしよう。すなわち、①両手が触れあう、

②物に触れる、③触れることと見ること、④他者経験、である。[6]

① 可逆性の現象は何よりもまず、右手が左手に触れるということ、両手を重ねあわせるということに認められる。右手が左手に触れているとき、われわれはその気になりさえすれば、左手で右手に触れかえすこともできる。こうした関係は、触れる身体と触れられる身体の逆転であり、可逆的な関係である。両の手はそれぞれのときに、いわば主観であり、また対象である、可逆的な存在ということになる。この可逆性の現象においては、触れる手と触れられる手が同じ身体に帰属しているために、あたかも二つの手が同時に触れる手でも触れられる手でもあるかのように見える。しかしこれは厳密には、触れる身体に触れることができる、触れるものにわれわれが到達しうるということを意味しないだろう。触れている右手に左手が触れ返すとき、まさにその瞬間から右手は触れられるものとなり、触れる右手は失われてしまうのである。その役割を交換することはできるとしても、実際に交換が行なわれると、相変らず主観的なもの(触れる手)と対象的なもの(触れられる手)という関係にもどるのである。言い換えるなら、二つの役割の交換は可能であるが、つねにそのどちらか一方でしかありえず、そのどちらでもあるということはできない。少なくとも、ここで問題にされているのは、同時に触れる手でも触れられる手でもありうるということではなく、むしろ主観的なものと対象的なものがそれぞれの手において反転しうるということである。

② メルロ＝ポンティは、私が世界の物、たとえば眼前のコップに触れる場合にも、可逆性があると言う。しかしこの事例は、上で述べた両手を重ねあわせるという事例とは異なっている。一見して明らかなように、コップには、

われわれがもっている能力と同じ意味での触れる能力がないからである。私がそのコップに触れているとき、〈触れるもの〉と〈触れられるもの〉の逆転は起こりがたい。あるいはそれをすんなりと受け入れることはできない。

しかしある意味で、われわれはコップに触れられている。メルロ＝ポンティは触れる身体が〈触れられるもの〉(le tangible)の一つであることを強調する。われわれが触覚的な存在であるからこそ、つまり押すとある種の反発をする存在であるからこそ、触覚経験をうることができる。われわれの手が〈触れられるもの〉でなければ、われわれはこのコップを手にすることもできない。そのかぎりでわれわれが〈触れられるもの〉であることが、われわれの触れるという経験の前提である。われわれは〈触れられるもの〉であるからこそ触れることができる。メルロ＝ポンティが強調するのはまずこの点である。われわれが触れられる存在であり、さらにわれわれが触れている物が触れられる存在であるからこそ、触覚ということが成立し、さらにわれわれがその物に触れられてもいるのである。この私の触れている手において行われる、触れる―触れられるの反転は可逆性の一つの事例である。

「物が私の身体に触れる」という言い方に一種の不自然さがあると言うものもいるだろう。われわれは普通の物に対して、われわれがもっているような触覚能力を認めていないからである。もともと触れる能力をもたないコップが私に触れるというのは、たんなる比喩的表現にすぎないのではないか、右手と左手が触れあうという場合であれば、どちらの手にも〈触れるもの〉という資格が認められるため役割の反転は不自然ではないが、「物が触れる」という言い方はやはり不自然である、触覚における可逆性が成立するのは身体においてだけではないのか、と言うのである。これは、むしろ、触覚を主観―対象という二元論的図式から考えようとするからであろう。二元論的図式に基づく触覚とは、〈触れる主観〉を一方の側にだけ想定し、その〈触れられる対象〉に対する能動的な探索によって成立する「主

観の能動」としての触覚である。まさに、こうした触覚の捉え方が批判されているのである。メルロ＝ポンティが、私の手が物に触れる場合、触れる手と触れられる物のあいだに可逆性があると主張するのは、二元論的な触覚の捉え方を排し、〈触れられるもの〉が〈触れられるもの〉に接触することによって生ずる触覚を問題にしているということである。これは他の感覚（メルロ＝ポンティが問うのは視覚であるが）についても同様のことが言える。ここではもはや主観としての人間だけが感覚するということではない。ところが、そうした触覚を問題にするとしても、やはりここでもわれわれは「物が触れる」に到達することはない。メルロ＝ポンティじしんが認めているように、われわれがついに触れる手に触れることはできないのと同じように、私の手に触れるコップに触れることはできず、私がそのコップに触れたとたんにコップは〈触れられるもの〉となってしまう。もちろんこれはコップに「触れる能力」を認めることができないということではない。可逆性の概念が支えているのは、〈触れられるもの〉（ふつう対象と目されるもの）のなかに触れるもの（主観的な作用）を捉える可能性のことではないだろう。〈触れられるもの〉と〈触れられるもの〉の接触によって生ずる触覚という出来事、それに同時にいわば参加する触れる手と触れられるコップの関係が問題にされているのである。

③　メルロ＝ポンティは「触覚による触診……眼による触診にしても結局のところ、それの特徴的なヴァリアントである」（VI. 175）、「視覚はまなざしによる触診である」（VI. 177）と述べている。視覚を「まなざしによる触診」と見做すこうした同形性の指摘は、触覚においてまさにわれわれが〈触れられるもの〉であるからこそ触れることができるように、視覚の場合も、見ることができるのはわれわれが〈見えるもの〉だからであるということを示すためで

ある。つまりここでも視覚そのものの性格の二元論的意味からの改変が試みられていると言える。視覚を行なう感覚器官そのものにしても、色に棲まわれている形の世界、〈見えるもの〉の世界のなかに場を占め、まなざしにしても触覚的世界のなかに記載されうるのでなければならない。〈見えるもの〉と〈見えるもの〉の視覚的な接触、視覚的存在の接触こそが視覚だとされているのである。そのうえでメルロ＝ポンティはこうした複数の経験、通常判別される感覚器による経験が、可逆的なものであることを示そうとする。

感覚のあいだの可逆性に関して言及されているのは、この触覚と視覚である。この触覚と視覚のあいだの可逆性についての記述は、メルロ＝ポンティが「可逆性」という表現に込めようとしていたことをより詳細に示唆している。たしかにわれわれが触れているほとんどのものは〈見えるもの〉であり、また見ているものは〈触れられるもの〉である。コップを手にするとき、われわれは〈見えるもの〉に触れ、〈触れられるもの〉をまさに見ているのである。そして〈見えるもの〉としてのコップは〈触れられるもの〉としてのコップと可逆的な関係にあり、そうしたものとしてわれわれの経験に与えられるのである。この可逆性についてのメルロ＝ポンティの記述は次の一節でほとんど尽きていると言える。

> どのような〈見えるもの〉も〈触れられるもの〉のなかで裁断され、あらゆる触覚的存在に可視性がいわば約束されており、触れられたものと触れるもののあいだだけではなく、〈触れられるもの〉とそのなかに嵌め込まれている〈見えるもの〉のあいだにも浸食(empiétement)、跨ぎ越し(enjambement)がある、逆に言えばこの〈触れられるもの〉にしても可視性のないものではなく、視覚的なあり方を欠いたものでもない……この同じ身体が見、

かつ触れるのだから、〈見えるもの〉と〈触れられるもの〉とは同じ世界に帰属している。……どのような視覚であっても触覚的世界のどこかで行なわれているということ、これはあまりに注意されることの少なかった驚異である。〈見えるもの〉の〈触れられるもの〉への、〈触れられるもの〉の〈見えるもの〉への二重で交錯した依存というものがあり、この二つの地図は完結したものである、ところがこれらの地図は混ざりあうことがない。この二つの部分は全体的部分ではあるが、重ねあわせることはできないのである。(VI. 177)

われわれはいわゆる五官を駆使してわれわれの前に(あるいは後に)あるコップを経験する。コップは視覚的存在であり、触覚的存在であり、さらには嗅覚的でも、味覚的でも、聴覚的ですらある。そうしたさまざまなあり方はこのコップを軸として可逆的であると言うことはできる。しかし、ここで注目すべきなのは、可逆性で結ばれるこうした経験が微妙なズレを被ったものとして記述されているということである。さらにおのおのの経験がただ一つの経験を構成しながら、それぞれ一つの世界経験として全体性を保持しているということである。触覚による地図も、視覚による地図もそれぞれじたい完結した地図であり、さらにそれだけで世界の地図たりうるものであり、そのかぎりで触覚の地図は視覚の地図が示すであろう世界と同じ世界を示す。触覚の地図の世界が主題化されるとき、視覚の地図はそれにつき纏いながらついに顕在化されることがなく、潜在的なものにとどまるのである。逆に、コップを見ることが主題化されるとき、〈触れられるもの〉としてのコップはいわば背景に退く。そのかぎりでこの二つの地図は「混ざりあうことがない」のである。触覚と視覚にかぎって言うなら、〈触れられるもの〉が〈見えるもの〉と完全に一致することはありえないが、にもかかわらず、それらは可逆的に交換可能なのである。そうしたかたちで経験を成立させる、つま

り〈見えるもの〉としてのコップと〈触れられるもの〉としてのコップの可逆性を可能なものとするこのコップこそが、メルロ＝ポンティの言う〈肉〉なのである。

④　さらにメルロ＝ポンティが可逆性を指摘しているのは、いわゆる他者経験における可逆性である。他者経験に関してここでのメルロ＝ポンティの記述は、すでに述べておいたように、表面的には一種の揺らぎを示している。むしろわれわれには、メルロ＝ポンティが他者の経験を二段階の手続によって分節していると思われる。一つは自他に共通の基盤を指摘することによって、他者が存在論的に自己から区別されるとする議論を封じる段階であり、もう一つは〈見えるもの〉という共通の基盤にたちながら、他者の知覚と私の知覚の重なりあうことがないのを強調する場面である。まずメルロ＝ポンティはこう述べている。

私の左手は、〈触れられるもの〉を触診しているさなかの右手に触れることができ、触れているさなかの右手に触れ、右手の触診を左手に向けかえすことができるのだから、どうして私は、他人の手に触れながら、そのなかで、私が手のなかで触れている物と共鳴するあの同じ力に、触れないということがあるだろうか。（VI. 185）

引用のなかに見られる「物と共鳴するあの同じ力」とは、触覚において「私は、私の手に、とりわけ運動の程度、速さ、方向を与え、そうすることによって、私は滑らかなもの、ざらついたものという織物を感ずる」（VI. 175-76）ことのできる能力、物に触れるために、物を押したり押しかえされたりする能力のことである。すでに見ておいたよう

に、こうした能力をもつのは私の手が〈触れられるもの〉で仕立上げられているからである。メルロ＝ポンティはここで、他者と私に共通の基盤があることを指摘する。私の右手と左手が同じ〈触れられるもの〉で出来ているように、そしてその〈触れられるもの〉が触れることのできない〈触れるもの〉を背後にもっているように、他者の手も同じ〈触れられるもの〉で仕立上げられており、その他者の〈触れられるもの〉の背後にも、われわれには触れることのできない奥行きがあるのである。

しかし、これは、私が「他者が触れる」に到達できる、それを捉えることができるということではない。メルロ＝ポンティの記述が、一見すると、右手と左手を触れあわせる場合に、両方の手の「触れる」という経験をもちうるのと同じように、他者の手を握る場合にも他者が触れるという経験をもつことは可能である、と述べているように思われるとしても、そうではない。右手と左手の場合にそれが可能であるのは、その両手がともに私の身体の部分だからであり、他者との関係において、他者が触れるということを捉えることが可能であるためには、「手や眼が各々の身体の器官であるように、われわれの各々の身体がその器官であるといった巨大な動物」(VI. 187)を考えなければならないが、そんな動物は存在しないのである。

メルロ＝ポンティが、私の右手と左手の関係と私が他者の手を握る関係に、ある種のアナロジーを見出すとしても、そのアナロジーが全幅にわたるわけではない。右手と左手の場合、私は右手が左手に触れるということも、左手が右手に触れるということも経験できる。そうした二様に分節される経験が、あたかも同じ一つの経験であるかのようにすら思われる。それは右手も左手も私の身体の一部だからである。しかし他者との経験においては、事情が異なっている。私は、私の手が他者に握られるということは経験できても、他者が私の手を握っているという経験はついに到

達しえない経験のままである。言い換えるなら、私の手が他者に触れられると他者が私に触れるとは、可逆的だとしても、同一のことではないのである。

すでに述べたように、右手と左手を触れあわせる場合にしても、私が物に触れるという場合にしても、役割の交換が完全に行なわれるわけではなく、つねに一定のずれ、隙間をもって行なわれている。メルロ＝ポンティは、あたかも先の記述を覆すかのように、次のように述べている。

> はじめにわれわれは〈見るもの〉と〈見えるもの〉、〈触れるもの〉と〈触れられるもの〉の可逆性について大雑把に語っておいた。しかしここでは、つねにさし迫ってはいるが、事実上永遠に実現されることのない可逆性が問題なのだと強調しなければならない。私の左手はつねに、物に触れている右手にまさに触れようとしている、しかし私はけっして一致にいたらない。一致は生み出されるその瞬間に消えてしまう。(VI. 194)

「可逆性」ということでメルロ＝ポンティが言おうとしていたのはまさにこうしたことであろう。前言の撤回、修正であるかのように見えるとしても、「実現されることのない」、「一致にはいたらない」ということは可逆性の現象のそれぞれに見出されることである。可逆性によって結ばれていようと(あるいは可逆性によって結ばれているかぎりで)、私はじぶんの経験においてさえ「私」に一致することがなく、他者の経験においても他者に到達するということがもともとありえない。役割の反転は可能であるが、その一方に到達しようとして反転しても、一方はつねに捉えられないままにとどまる、こうしたあり方をメルロ＝ポンティは可逆性と呼んでいるのである。

この「実現されることのない」、「一致にはいたらない」ということは他者との関係において顕著に見出されるとしても、そこでのみ見出されることではない。われわれが物を見る場合にも、〈見るもの〉と〈見られるもの〉の反転は可能であるが、われわれはついに「物が見る」を捉えることはできない。右手と左手に関しても同様である。触れている右手に左手が触れるとき、言い換えるなら右手が〈触れられるもの〉の列に降下するとき、右手はその世界把握を中断する。そのかぎりで「実現されることのない」ということは「可逆性」の本質的な意味なのである。

可逆性をこうした意味で考えるとき、〈肉〉とはどのようなものとして現われてくるのか。もちろん身体だけが〈肉〉ではない。われわれが眼にするコップやテーブル、さらには風景も〈肉〉として存在するものである。次の章であらためて〈肉〉の問題を考えてみることにする。

Ⅳ 〈見えるもの〉の奥行き

可逆性は、見てきたように、方向の逆転の可能性であり、可逆性概念の言挙げは、二つの項のあいだに一方向的な関係(主観が対象を構成する)を設定する考え方に対する批判、さらにその一方向的な関係の固定化の根底にある二つの項の存在論的な区別(そこにあって主観の作用から独立したものとして自足し、まったく客観的なものとして措定される対象と、何処にもなくて何処にでもあり、至るところから世界をまなざす主観)を主張する二元論に対する批判であった。方向の逆転を保障してくれるのは、関係をなす二つのものが、ともに〈見えるもの〉、〈肉〉で仕立上げられているということである。しかし、これは二つの項の完全な融合、一致を意味するものではない。〈肉〉とは、それと

相容れないもの、それを越えているものが思考できなくなってしまうようなものではなく、むしろ〈肉〉そのものが異他なるもの、捉えることのできないものを裏面にもっているものとして考えられている。メルロ＝ポンティの優れた評者G・B・マディスンは、メルロ＝ポンティによる二元論の乗り越えが、確かに二元論の拒否であるが、一元論、「一」なる原理への回帰を意味するのではなく、むしろ二元性を併せもつ起源への回帰であるとしている。[7] われわれが確認した「可逆性」は十分にそれを示していると思われる。

〈肉〉としての身体に見出された可逆性とは、〈見るもの〉と〈見えるもの〉の可逆性であった。その一方が顕在的なときには他方がつねに潜在的なものとして一方の背景をなすような関係、一方が表にでると他方はつねに裏になってしまう関係である。つまり身体は、〈見るもの〉と〈見えるもの〉の一致には到達しないが、その表裏がつねに逆転されうるという緊張を抱えて存在しているのである。こうした可逆性から逆に〈肉〉一般を見るなら、〈肉〉とは裏面をもつ表面、潜在を抱える顕在であり、そしてまた、表面の背後にあり、表面を支えている裏面だと言うことができる。われわれはこうした可逆性を「身体」を例として吟味してきた。しかし、〈身体〉は〈肉〉そのものではなく、〈肉〉の特別なヴァリアントである。むしろ〈肉〉の一般的なものとしての〈見えるもの〉のあり方を可逆性がどのように表現するのか、これを見ることによって小論を締めくくることにしよう。われわれが眼にしている〈見えるもの〉とはいかなるものであるのか。

〈見えるもの〉はさまざまな関係、文脈のなかに置かれることによってまさに見えるものとなる。つまり〈見えるもの〉は外的地平だけではなく、内的地平とも関わっているのである。たとえばコップにしても、その脇にあるものと

の関係だけではなく、コップがあることによって顕在的に見ることのできないものをいわば背後に抱えることによって、コップは〈見えるもの〉となりうる。その隣にあるものとの関係に関しては、どちらが主題化されるか、ということによっていわば主役と脇役のあいだに可逆性が成立している。同時に、そのコップがその場所にあることによって、あるいは、われわれがコップに対してある特定の位置関係にあるために、少なくともわれわれには見えなくなっているものとのあいだに可逆性が成り立っていると言うことができる。

メルロ＝ポンティは、「肉が存在する」ということを「立方体の隠れた面が、私の眼の前にある面と同様に、何処かに光線を発している」（VI. 184）と言い換えている。もちろんわれわれが眼前にしているこの物には、われわれには見えない裏面をもっており、さらに言うなら、われわれが見ている同じ面が、われわれがこの場所から見ているかぎりで、ここからの見え方とは異なる見え方を他の方向に対して示しているとも言える。奥行きのなかにあるものとして存在しているのである。いわば〈肉〉、〈見えるもの〉は、われわれの側から見えるものだけではなく、さまざまな角度から、さまざまな文脈のなかで見られることによって、われわれには見えていないが可能的には見えるさまざまな見え方を自己の内に織り込んでいる。さまざまな見え方が緊張しながら、可逆性の関係に置かれて、〈肉〉は存在している。メルロ＝ポンティはさらに次のようにも述べている。

……〈見えるもの〉の固有性とは、汲み尽くすことのできない〈奥行き〉の表面であるということである。このことが〈見えるもの〉をわれわれの視覚とは別の視覚にも開かせる。この別の視覚は実現されながら、われわれの現実の視覚の限界を告発する……。（VI. 188f）

〈見えるもの〉はつねに奥行きのなかに置かれて存在している。そしてその奥行きは私の側からは、ついに見ることのできないものである。われわれが、いま見ている位置から脇に回れば、いままで奥行きを構成していた物の厚みに当たる部分は見えてくるだろう。しかしその瞬間から、われわれが見ているのは、同じものではあるが、新しい奥行きの表面だということになる。奥行きを汲み尽くすことはけっしてないだろう。それがまさに〈見えるもの〉の固有性である。そのかぎりで、われわれはつねに物の半身、不完全な部分的な視覚しか手に入れていない。確かに、われわれの側からすれば見えない見え方を、他人は見ている。つまり奥行きのなかにある物は、そのかぎりでわれわれだけが見るわけではなく、他人にも見えるものとなり、われわれが現実にいまもっている視覚の限界を告発するだろう。しかしその限界は踏み越えることができる。先に述べたように、われわれが運動することによって、奥行きの箇所もまた〈見えるもの〉、奥行きの表面として、われわれはまなざすことができる。そして、その〈見えるもの〉は新たな奥行きを背後に抱え、新たな限界が設定されるのである。

〈肉〉とは、捉えられない裏面をその表面の背後にもつものであり、そしてその裏面にしても、われわれに永遠に捉えられない「謎」というわけではなく、その表面と裏面は裏返すことができる。これが、可逆性の意味であった。さらに可逆性が、一致の実現を逃れていくものであるかぎりで、われわれに直接与えられているのは、そのどちらか一方だけであり、残る一方は現われていない（が、その背後にある）ものとして与えられているのである。

[注]

(1) Maurice Merleau-Ponty, *Le visible et l'invisible*, 1964, Gallimard. 以下、引用は、略号 VI. を用い、頁数とともに本文中に示す。

(2) Claude Lefort, "Flesh and Otherness", in *Ontology and Alterity in Merleau-Ponty* (eds. G. A. Johnson & M. B. Smith), 1990, Northwestern University Press, p. 3

(3) cf. Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, 1945, Gallimard. たとえば、pp. 406-415. など。さらに James Schmidt, *Maurice Merleau-Ponty-Between phenomenology and structuralism*, 1985, Macmillan, pp. 70-80

(4) Lefort, op. cit., p. 13. ルフォールがその例として挙げているのは、幼児の経験である。つまり幼児の経験と成熟した成人の経験のあいだで可逆的な交換を認めることができないとしているのである。

(5) M. C. Dillon, *Merleau-Ponty's Ontology*, 1988, Indiana University Press, p. 157f.

(6) 『見えるものと見えないもの』のなかでメルロ＝ポンティは、これ以外にも、言語と知覚のあいだの可逆性などに言及している。小論の目的が「可逆性」のあり方を解明することにあるため、それについてはここでは触れない。cf. Dillon, *op. cit.*, pp. 169-173

(7) cf. G. B. Madison, "Du corps à la chair: Maurice Merleau-Ponty" in *Analecta Husserliana*, Vol. XXI, 1986, pp. 167-188